

## ずるくプリティ、選びぬいてエレガント

あ

る新聞のコラムを書くために、芦田多恵さんにインタビューしたことがある。

女性もふつうに組織のトップに立つ時代、組織を代表して人前に入るエグゼクティブウーマンはどのような装いをすべきなのか、というテーマだった。

紙幅が限られていたそのコラムでは紹介できないままに、ずっと記憶に残っている話がある。「毎シーズンのデザインのインスピレーションは、どこから得るのですか?」と聞いたとき、ずばり、「生地です」と多恵さんが答えたこと。服地をたくさん見るうちに、デザインのアイデアがわいてくる、と。生地から服。あたりまえのことなのだが、「時代の気分から」とか「町のムードを見て」なんていう、ほんやりしたことばが出てこなかったことが、嬉しく共感もてた。ああ、<職人>だなあ、と。

多恵さんが生地から服をつくるように、私もことばから文章をつくる。たとえ書くテーマがファッションやトレンドであろうと、具体的な材料はことばしかない。生まれたばかりの新しいことばや、意味があいまいなまま好まれて流通していることば。何気なく使われているそんなことばの、最初に使われた起源にさかのぼって現代と照らし合わせたり、まったく別の局面での使われ方から光を当てたりすることで、ようやく結果として、漠然と漂う「時代の気分」とやらを具体的な文章として表現できる(こともある)。生地から服。ことばから文。あくまで具体的な材料を用いて「気分」を表現しなくてはならない仕事をする職人としての連帯感を、その時から私は多恵さんに勝手に抱いているのである(失礼お許しください)。

ところで、ことばの源、なんていうかびくさい話は、常に新鮮であることを求められるファッションの対極にあることになっている。「ファッションは感性だ、理屈じゃない」という人もいる。でも、ことばが秘める物語をちょっとだけ知ることで、風景が少し、違う感じに見えてくることもあるかもしれない。

たとえば、ファッション誌にも頻繁に登場する、プリティ (pretty)。

このことばは本来、「ずるい」という意味をもって生まれた。長い歴史の過程を経て、ずるい→利口な→巧みな→立派な→快い→かわいい、のゴールにたどりついた次第である。と知れば、「かわいい」ドレスや靴やしぐさの背景にひそむ、戦略的なずるさが見えてくるような気がしませんか?

## 中野 香織 / Kaori Nakano



Photo : © Jean Grisoni

また、美しさや魅力を表現するために不可欠なエレガント(elegant)も、くせものである。語源には、「注意深く、選ぶ」という意味があり、注意深く選びぬいた結果が「優雅」で「上品」になるわけである。ところが、同じ「注意深く、選ぶ」ということが、「気難しすぎ」という非難のことばに転じた時期もあるのだ。大昔の話ではあるが、「あのマダムったら、ほんとにエレガントで」という表現が、「あのマダム、気難しくてイヤね」という揶揄を含んだ悪口になったのである。今ではホメことばとしてしか使われないものの、そんな経緯を知れば、「エレガント」な女性にはやはりかすかな気難しさの幻影が深みを与えている気がしてきませんか？ ちなみに、エリート(elite)は、親戚にあたることばである。選び抜かれた人。「あの人はエリートだから」ってホメるときにも、そういえば、微量の嫉妬と揶揄がスパイスになっていますね。

同じように多用される、ソフィステイクーション(sophistication)だって、一筋縄ではいかない。源にあるのは、「混ぜ物を入れて、純粋ではないものにする」というニュアンスである。混ぜ物を入れ込んで練って洗って「洗練」するわけだが、これがホメことばに転じたのは、都市化・工業化がすすむ1920年代以降のこと。自然で純粋な状態から遠く離れているものほど魅惑的、と見る目を人々がもつようになってからである。と知れば、都会的洗練には、ちょっと練りこまれた毒が必要、ということが見えてきたりする。

魅惑という意味を表すファシネーション(fascination)だって、本来はバリバリにマイナスイメージだった。なんたって「魔法で呪いをかけること」なのだ！ 呪いをかけられて恐怖で動けなくなる→抵抗できない→抵抗できないほどの魅惑、と意味が変化した。微妙にマゾっぼいが。

まだまだ挙げていくとキリがないが、<ファッション界の人気ワード>として君臨する上の4つのことばを生んだ本来の行為だけでも、想像してみてください。「ずるく策略を練る」「注意深く選ぶ」「不純物を入れる」「呪いをかける」。ファッションって軽佻浮薄な感性現象であるどころか、人間の業に根ざした、深い営みであるように見えてきませんか？ え？ 詭弁じゃないか、ですって？ まことしやかにウソを言う詭弁家ソフィスト(sophist)とは、sophisticationの秘密を知る人間ですから……。

中野 香織  
1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。著書に『着るものがない!』『モードの方程式』(ともに新潮社)、『スーツの神話』(文春新書)、訳書にエイザ・ブリッグズ『イングランド社会史』(共訳、筑摩書房)、ジャネット・ウォラク『シャネル スタイルと人生』(文化出版局)、アン・ホランダ『性とスーツ』(白水社)などがある。日本経済新聞、朝日新聞ほか連載多数。